

井ノ内稻荷塚古墳

1996

長岡京市教育委員会

I 調査経過

1 第1次～第2次調査

井ノ内稲荷塚古墳は、京都府南部の乙訓地域にある古墳時代後期の前方後円墳の1つである(図5)。しかし、1960年代後半に京都府教育委員会によって墳丘測量図が作成されてはいたものの、その詳細な実態は不明のままであった。

第1次調査は、大阪大学文学部考古学研究室を主体とし1993年に測量調査(3月15日～23日)および墳丘発掘調査(7月20日～8月11日)が実施された。その結果、古墳は後の時代にかなり削られていること、残存している墳丘の大きさは全長46m、後円部径29.5m程度であること、墳丘のほとんどは盛り土で造られており、埴輪や葺石は施されていないことなどが判明した。

この結果を受け、市内でも数少ない後期の前方後円墳であるこの古墳の保存、整備を考えるための基礎資料を得る目的で、長岡京市教育委員会が主体となり第2次調査が1994年7月20日から8月11日までの期間で行われた。この調査では後円部に横穴式石室、前方部に木棺直葬が存在することを確認するという大きな成果をあげた。さらに、前方部の木棺直葬に納められた須恵器の年代から、古墳が造られたのは6世紀中葉頃であることが推定された。また、横穴式石室の天井石はすべて持ち去られていたが、その攪乱坑から出土した土器の状況から判断して、それは長岡京造営に関連した石材採取行為を原因とするものであると推定された。

2 第3次調査

第2次調査の成果をふまえ、後円部に存在する横穴式石室の残存状況および規模、構造、構築時期を明らかにすること、さらに他の埋葬施設の有無を確認することを目的として第3次調査を実施した。調査主体は長岡京市教育委員会、期間は1995年7月21日から8月18日までの



図3 墳丘の現状(前方部東コーナー側から)



図4 小西1号墳(稲荷塚古墳北側、南東から)

約1ヶ月間である。

発掘区は後円部墳頂部に1箇所(後円部調査区)、クビレ部墳頂部に1箇所(クビレ部墳頂トレンチ)を設定した。調査面積は60㎡である。

後円部調査区ではまず横穴式石室に対する攪乱坑の輪郭を確認したのち、攪乱土の除去作業を行った。攪乱の範囲が予想以上に大きく、また調査区南側では墳丘の盛り土と攪乱土の見分けがつきにくかったため、掘り下げ作業は難渋したが、ようやく8月4日になって横穴式石室残存部上面の全形を確認することができた(図11)。今回の調査は石室の残存状況を確認することが目的であったため、この段階で石室の検出作業を中止し、現状の実測、写真撮影を行った。ただ、羨道部が調査区外にまで伸びることが確実なためその正確な規模が未確認であること、後円部墳頂部に祭られている祠のため玄室奥壁はその一部の確認に止まったことは今後の課題として残された。一方、クビレ部墳頂トレンチでは、埋葬施設の存在は確認されなかったが、トレンチの北半部で多くの須恵器がまとまった状態で出土し、この古墳の築造時期を推定するための良好な資料を提供した(図14)。

すべての記録作業を終了したのち、8月12日には調査成果について現地説明会を実施し、多くの参加者を得た。その後、土のうを用いて埋め戻し作業を行い、18日にはすべての作業を終了した。



図5 稲荷塚古墳周辺の主要古墳分布図

Ⅲ 埋葬施設の構造

1 横穴式石室

第2次調査(図9)で存在を確認した横穴式石室よこあなしきせきしつにかんして、第3次調査ではその規模、構造等を明らかにするために発掘区(後円部調査区)を設定した。以下では、その横穴式石室と、横穴式石室の上部を大きく破壊する攪乱坑かくらんこうについて概要を報告する。

横穴式石室 羨道せんどうが調査区外に伸びることが想定される上、石室の残存部上面を確認した時点で掘り下げを中止したため情報が限定されるが、現在判明している範囲で報告する。

この石室は右片袖式の横穴式石室で、主軸を北から31°東に振り、西側クビレ部に向かって開口する(図11)。天井石はのちの攪乱のためすべて持ち去られ残存していない。石室規模は、現在確認している範囲で、全長9.9m程度、玄室長4.5m、玄室幅は玄門付近および玄室中央で1.8m、羨道長5.4m、羨道幅は玄門付近で1.2mである。ただ、後円部墳丘トレンチ調査で確認された標高41.9m付近の地山整地面まで石室基底部が達していると考えられるなら、石室床面は現在の検出面からさらに約2mの深さに位置することになる。壁体の持ち送りを考慮すれば、床面における玄室規模は長さ5m、幅2.5m程度に達する可能性がある。

玄門部から南へ約4.5mの付近の羨道部東壁は、石材が4段分積まれた状態で残存している。これらの石材は多少原位置から動いている可能性があるものの、石室内側に向かって持ち送りがなされている。石室壁体石には砂岩、チャート、緑色岩類などが用いられている。いずれも付近の露頭で採取されたものと考えられる。比較的大きな石材はチャートや緑色岩類である。

石室の裏込めには主に粘質土を使用する。しまりが良く、粘性があり、大きな礫を含まない黄褐色系と茶褐色系の土を細かい単位で交互に積んでいる。



図9 後円部墳頂トレンチ(第2次調査、南から)



図10 攪乱坑のライン(後円部墳頂トレンチ東区)



図11 横穴式石室全景(南西から)

内部を調査していないため横穴式石室築造の時期を直接示す遺物は確認されていない。しかし、この石室は後円部の中央に位置することからこの古墳の中心埋葬と考えられ、前方部で確認された木棺直葬^{もっかんじきそう}やクビレ部墳頂トレンチで出土した須恵器^{すえき}の時期がいずれも陶邑編年のTK10型式期にあたることから、これらとほぼ同時か、それよりさかのぼる時期を想定できる。

攪乱坑 攪乱坑は石室壁体石の裏側にまでおよぶ大規模なものである(図10)。横穴式石室の東側についてはその範囲を確認したが、それ以外の箇所は調査区外にまでおよんでいる。

注目されるのは、玄室のほぼ中央にあたる位置でまとまって出土した土師器^{はじき}である。いずれも長岡京期のものと考えられ、この攪乱の時期を示している。土師器の中には、その外面に墨で人面^{じんめん}が描かれることがあるタイプの壺が含まれていることから、これらの土師器は何らかの祭祀に伴うものであると考えられる。攪乱坑内からは、これ以外にも、底部に墨書^{ぼくしょ}を持つ須恵器をはじめ、長岡京期の遺物がいくつか検出されている。

ところで、この攪乱については、石室内の盗掘のみが目的であったならこれほどの大規模な攪乱は不必要である。石室石材の裏側にまで攪乱がおよんでいることから、石室石材の抜き取りが目的であったと考えるのが妥当であろう。この石材抜き取りに際して土師器を用いる祭祀が行われたと想定される。また、攪乱の時期を考慮すると、この大規模な攪乱は、長岡京造営工事に使用する石材を調達することが目的であった可能性が考えられる。



図12 前方部墳頂トレンチ北壁土層断面と木棺直葬(南東から)

2 木棺直葬

第2次調査で設定した前方部墳頂トレンチにおいて、現地地表下2 mの位置で木棺を直葬した主体部を確認した。主体部は墳丘の主軸に直交し、前方部の東側に偏って位置する。

墓壙^{ほこう}は盛り土を掘り込んで構築している。断面観察の結果、上面は攪乱層によって削られているものの、掘り込みの西端（図12の左上方）が検出できた。東端（図12の右下方）は、さらにトレンチ東方に存在すると考えられる。推定される墓壙の規模は、上面で長さ5.4 m以上、下面で4.8 m以上になる。

木棺墓は、^{くみあわ}組合せ式^{しきはこがなもつかん}箱形木棺^{こぐちいた}である。小口板が側板の外側に接する形態をなす（図13）。木棺墓の規模は長さ約3.5 mで、幅は0.6 m以上である。小口板の南北長は、現状で0.7 m確認できる。小口板の厚みは東側より西側の方が厚い。それぞれ8 cm、15 cmほどである。また側板の厚みは7 cmほどで、一部わずかに木質が残存していた。木棺の西端（図13の下方）は、墓壙壁から0.5 mの間隔をおく。東端では、墓壙との間隔はさらに広がる。

木棺墓には須恵器が副葬されていた。現状で、須恵器は木棺内東端の小口板に接した状態で5セット分が確認されている。北側から横瓶^{よこべ}と考えられる個体、杯身^{つきみ}・杯蓋^{つきぶた}のセット、短頸壺^{たんけいつぼ}とつまみ付蓋のセット、杯身・杯蓋のセット、南端も杯身・杯蓋のセットである。これらのなかには、その表面に赤色顔料が塗られているものもある。

木棺墓の両小口外側では、裏込め土のなかに、円形のピットが1箇所ずつ検出された。両方とも直径約20 cmである。東側のピットは木棺墓から約30 cm、西側は7 cm離れて位置し、両者の間隔は3.8 mである。未掘のため、深さはわからない。木棺の埋設に当たって、墓壙内に木棺を吊り下げるなどの用をなす支柱が立てられた痕跡の可能性もある。

この主体部は上述の段階で掘り下げを中止し埋め戻した。これが墳頂中央部からかなり東に偏在することから他にも複数の主体部が存在する可能性が高く、その確認作業も今後に残された課題である。

図13 木棺直葬全景(上が東側)





図14 クビレ部墳頂トレンチ須恵器出土状況(北から)

IV 出土遺物

3次にわたる調査で、稲荷塚古墳が築造された時期を知る手がかりとなる遺物が良好な状態で出土している。1つは、第2次調査でその存在が判明した前方部の木棺直葬に副葬されていた須恵器のセットである。もう1つは、今回の第3次調査でクビレ部墳頂トレンチから出土した須恵器群である。これらの須恵器を中心に出土遺物の概要を以下に述べる。

前方部には、古墳の主軸に直交して東西方向に長軸をもつ組合せ式の木棺が直葬されている。木棺内の東側の小口^{こぐち}には、杯身・杯蓋の組み合わせが3セット、短頸壺・つまみ付蓋の組み合わせが1セット、横瓶^{よこべ}と考えられるものが1点の合計9点の須恵器が副葬されており、原位置をそのまま保っていた(図15)。木棺の北側は未検出のため、さらに別の須恵器があるかどうかは分からない。また、須恵器以外の副葬品の有無も今後の調査を待たなければならない。須恵器は陶邑編年のTK10型式期に併行する時期の特徴をもっており、成形や焼成は良好である。

第3次調査では、埋葬施設の有無を確認する目的で、クビレ部の墳頂(鞍部)にトレンチを設定した(クビレ部墳頂トレンチ)。その結果、埋葬施設の存在は確認されなかったものの、地表下60~80cmのレベルから、須恵器高杯形器台^{たかつきがたまきだい}、須恵器高杯・つまみ付蓋、須恵器杯身・杯蓋、

土師器高杯などの破片が面的に広がって出土した(図14)。これらはトレンチ北端の約2 m四方の範囲で出土し、一部散乱しているものの、比較的器種ごとにまとまっている。ほぼ完形に復元できるものから接合する破片がないものまで存在する。出土した須恵器の大半は陶邑編年のTK10型式期に併行する時期の特徴をもっているが、成形や焼成は悪く、陶邑で製作された須恵器の特徴とは若干異なっている。須恵器高杯形器台の脚部がほぼ正立した状態で出土するなど出土状態からは墳丘構築の際に据え置かれたものとも考えられるが、出土したレベルは本来ならば墳丘の内部と考えられるにもかかわらず土層断面に土坑などの掘り方がみられなかったことや残存墳丘面と考えられる面よりも上層から出土していることから、原位置を保ったものではない可能性があり、詳細な検討は今後の課題である。

後円部調査区からは須恵器、土師器、銅銭などが出土している。須恵器は陶邑編年のTK209型式期に併行する時期以降のものが多く、横穴式石室における追葬に伴うものも含まれると思われるが、確実に古墳に關係する時期のものは少ない。土師器は、第2次調査で長岡京期の祭祀専用土器が横穴式石室上面の攪乱坑内から出土しており、古墳の破壊に対する鎮魂の儀式に使用されたものと考えられる。第3次調査でも同じ時期の土師器が数点出土している。その他に中・近世以降の土器も多く出土している。詳細な報告は今後に委ねたい。

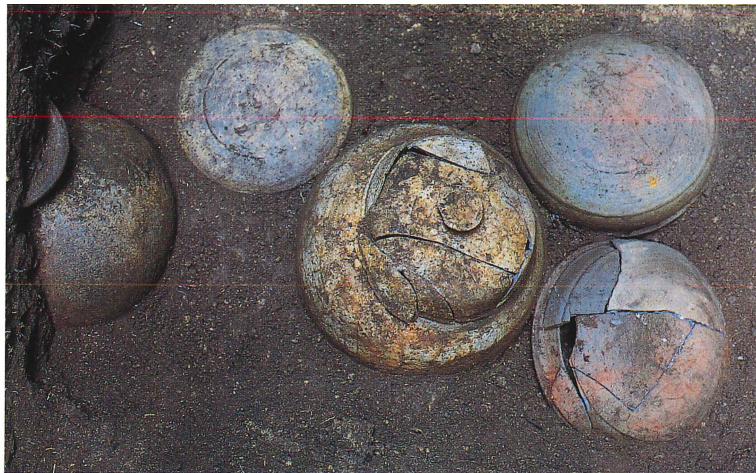


図15 前方部木棺に副葬された須恵器

INOUCHI-INARIZUKA TUMULUS



March 1996

Nagaokakyo Municipal Board of Education
Kyoto Prefecture JAPAN